



The Garden City
つなぐ、守山

*緑の葉と水の雫をモチーフにした守山ブランドのロゴマークです。
小さな活動が種となって、大きく育つ「守山」をイメージしてタイトルをつくりました。

平和を願う竹灯籠320本を製作

市遺族会の小嶋 宣秀さん 英霊を偲ぶ「みたま祭り」で奉納



竹灯籠を製作する小嶋さん(左)と山川さん



終戦記念日にちなんで、護国神社(彦根市)では、たくさんの提灯で英霊を偲ぶ「みたま祭」(県遺族会主催)が営まれました。今年も提灯だけでなく、320本の竹灯籠が参道をほのかに照らしました。

今年度から県遺族会会長に就任した山川 芳志郎さんの相談を受けて、市遺族会の小嶋 宣秀さん(勝部1)が竹の切り出しから製作、運搬まで一手に引き受け、奉納したものです。地域の協力で、勝部神社火まつりの大松明の竹も使われました。

広島原爆忌や終戦記念日に合わせ、市遺族会などは市内で恒久平和を願う催しをしていますが、今年はウクライナへの侵攻も勃発したこともあり、ひときわ切実な平和への祈りを、竹灯籠の明かりに託しました。

佐川美術館「アートコラム 61」

地元に伝わる妖怪のはなし

学芸員 佐川美術館
藤井 康憲



佐川美術館で9月16日(金)から開催する「水木しげるの妖怪百鬼夜行展」お化けたちはこうして生まれた」では、水木しげるが描いた約100点にのぼる妖怪画を公開します。今回はその中から、地元・滋賀県にゆかりのある妖怪をご紹介します。

近江国志賀郡別保村(現在の天津市別保)の「常元」という僧侶は、出家前に諸国で盗賊や殺人など、多数の悪行を重ねてきました。ある時、常元は昔の罪を改めて問われ、刑に処されることになりました。見せしめのため、木に縛り付けられた常元は見物人に罵詈雑言を浴びせました。処刑された後、常元の遺体は柿の木の下に埋葬されましたが、その後毎年、柿の木の下からおびただしい数の不気味な虫が現れるようになりました。今ではジャコウアゲハの幼虫と考えられていますが、まるで人間が後ろ手に縛られているようなサナギの姿から、当時の人々はこれを常元の魂と思い、「常元虫」と呼ぶようになりました。

全国各地に伝えられる妖怪を研究し続けた水木しげるも、この常元虫を描いています。水木の常元虫は、淡水に生息するマミズクラゲに着想を得て描いたと言います。世界各地に広く分布するクラゲですが、夏の終わりから秋にかけて見られることが多く、おびただしい数で大量発生するということも、まさに常元虫を思わせます。その巧みな発想力を用いて、一見無関係に思えるものも妖怪の姿へと変貌を遂げさせ、水木は生涯にわたる約1,000点もの妖怪画を手がけたのです。

※開館情報につきましては、ホームページでご確認いただくか電話【☎(585)7800】でお問い合わせください。